

『教育じほう』一九六四年五月号（東京都新教育研究会）

## 外国の教科書



矢口 新

(一)

教科書というものは、あらゆる意味で一国の文化を表現するものである。さまざまな国の教科書を比べながらみると、そういうことをしじみ感ずる。そこには、それぞれの民族の生き方があらわれているように思われる。生き方といっても単なる考え方でない。そういう生き方をしなければならぬという現実の条件を含めた、きわめて現実的な生きる姿である。

教育の制度や法令などというものを、書いたもので読んでみると非常に理想的ですばらしいと感じ、どの国もそう大してちがわないと思わせられてしまうが、実際に教育を見るとそうでもない。たとえば国民のすべてに近代的な教育を与えるなどと書いてみると、われわれは日本の教育の現実を土台として予想してみるのである。

しかし、ヨーロッパやアメリカに行つてその教育の姿をみるとわれわれの予想をこえて、近代的な教育とはこういうものかと思えられることがある。また反対に、東南アジア諸国の教育をみると、この程度でも近代教育というのかと思うことがある。教科書の現物をみるとやはりそれに似た収穫がある。つまりことばでは語れないものを語つて

くれるのである。

世界には国といつてもピンからキリまであるように、教科書にもそれがあつた。同じく国語の教科書、算数の教科書、理科の教科書などといつても、中身は決して同じでない。算数や理科などは万国共通であつてもよいように思うが決してそうではない。外形がすばらしくりつぱなものもあり、誠に貧弱なものもある。国の貧富を一面にはあらわすが、決してそれだけではないものがある。民族の教育についての考え方をあらわし、さらに細かくは学問について芸術について、その他文化の一般についての考え方やあり方をさまざまな角度から物語る。そして、実に多種多様な教育があるのだということがわかる。

日本人の教科書に対する考え方は比較的単純であるが、それがすでに日本人の教育観の単純さでもある。われわれが本当に教科書をよくしようと思つたら、それは結局最後には、教育をよくすることにつながるのであるが、外国の教科書をひろく見て、教科書をつくりあげるさまざまな条件を考えてみる必要がある。

(二)

教科書をつくるのはだれであるかということについても国によつてさまざまな形がある。日本人の頭では国定、検定、自由といった三つのおりの制度しか考えられないが、なかなか複雑である。しかし総じていえば、先進国といわれる国ではいわゆる国定や検定でなく認定するといった程度になつてゐる。イギリスのように学校または教員が自由に選択するような国は、一番自由を尊重しているといつてよいかもしれない。

どうしてそういうことのでやつていけるのかは、日本人にとって不思議であるかもしれない。国が検定しなければ信用できないといつて

あれば、教科書製造会社に対する不信である。あるいは著作者に対する不信であるかもしれない。

政治は信頼の上に立つべきだと改まって言うわけではないが、検定なしにやってみようということは、今の日本人にとってはちよつと夢のような話である。今の日本で検定がなくなったら、教科書をつくるのだということも忘れて非常識なことをする会社が出て来るであろう、と考えるのが日本人である。そういうことがないだけでもわれわれにはまねのできないことである。いや、いろいろな人間の世界のことだから、たまにはそういう連中もいるであろう。そういうのが幅をきかすことなく、社会の常識、教育界の自主的な規制で姿を消してしまうであろうが、そうだとすると、国民の健全な常識や教育界の良識も日本とはちよつとけたちがいであるといわざるを得ない。また国民全体の自主的な規則によつて落ちつく所に落ちついていくには、場合によつては時間もかかるであろう。日本だったら、すぐ国家が統制したほうがよいという声が出てくるであろう。しかし国家が規制する、その裏をくぐる連中が出るといったたちこつこをやっているのを見ると、国民の良識による自主的な規制というのは日本人には及びもつかないことであるようである。

自分の自由を尊重するには、他人の自由も尊重しなければならぬということがあるが、自分の自由だけ考えて、勝手なことをするのが自由だと思ふ国民には、結局その自由を維持することができない。だから国家という権力によるのであるが、それも結局は自分たちのつくる国家であるから、その国家も自分たちの反映である。その国家が自分たちとちがつて理想的なものであるはずがない。だから国家は国民を信じないで、国民をどろぼうと思つて規制するのである。つまり国民が自分で自由をしばつていくのである。そういうことをしないで

やつていける国民はやはり自由を尊重する国民と言えよう。自由を尊重し自由を守ることを知つてゐる国民というわけである。

検定した教科書でも絶対に誤りが無いということはない。検定をしない場合は一層誤りが多いと日本人は考えがちである。しかし神ならぬ身の人間だから誤りをおかさないとは考えられない。日本人だったらひとつでも誤りがあつたら大さわぎをして、だれがけしからぬとやかましいのであろうが、そういう気短さがまたすぐ国家統制を引き出すのであろう。

### (三)

以上のような点は、教育の中で教科書がどう使われるかということについての国民の一般的な考え方とも関係するのである。

日本で、教科書のちよつとした誤りをもなかなか許容することができずに、時によると新聞などで大きくさわぎたてることがあるが、これは教科書を教育の道具だというように考えることができないからである。本当は教科書の誤り以上に教師があやまつているかもしれないのだが、そういうことはいつこう問題にならない。こつけない話でもあるが、そこには教科書神聖観があるのであろう。教科書に書いてあることをおぼえるのだという考え方が強いのである。教育者もそれを解説するのであつて、それ以上には期待されないのである。口でこそ人間による教育などというが、結局は教科書注入主義なのである。私の手もとに、一九五五年のアメリカの教科書論をまとめた書物があるが、それには次のようなことが書いてある。

「たとえば、六年生なら六年生に同じ教科書を与えて、同じようなレッスンが成り立つという考え方は、ある概念を与えて生徒の心を動かして同じことを学習させることができるという前提に立っているの

である。しかし生徒の頭はそんなものではない。生徒は自分のもっている力で受けとって行くので、受けとり方、つまり学習の仕方は千差万別なのだ。教材の外形はおなじでも、生徒にもつ意味は非常にちがいがあがる。したがって生徒の頭を訓練するには、その生徒に即したテキストを使用しなければならないのだ。教科書は道具なのだ。」

この当時、アメリカも注入主義の教育観はないわけではなかった。しかしアメリカの指導的な教科書観は決して注入主義といったものではない。全体として教科書は、ひとつの道具にすぎない。社会科や理科の教科書は、日本だとしてもおぼえる事がら書いてあるが、アメリカの教科書は、おぼえることのない教科書である。とくに歴史などになると、昔のころの生活の姿が物語風に書いてあり、まるで小説のようなものもある。それを見て、児童、生徒はどうしてこういうように事件が進んでいったのかを考えるのである。そこでその時代の社会の構造や生活についての考え方や、生活のしかたなどを自分でまとめていくようになっていく。そういう頭を訓練する教科書という考え方はつきりと教科書作成者にあるのである。こういう考え方で検定などということは成り立たないのである。

教科書には絶対の真理が書いてあって、信じて疑わざるものであると考える考え方は、実は近代教科書の考え方ではない。書かれたことばがそのような神聖さをもつということがすでに近代的ならざるものであって、近代はことばを疑って事実の世界に無限にはいつていくところに生まれたのである。科学とはあくまで事実の中からつかみ出すものである。その活動が科学であるといつてよい。そういう世界に生徒をひき入れるために教科書もあるのである。こういう精神が外国の教科書には強く見られるのである。

## (四)

イギリスでは、同じ学年でおなじクラスの生徒であっても、使っている教科書がちがうことは普通である。同じ教科書であれば進度のちがうなどということは日常茶飯事である。否それがあたりまえだといつてよい。一クラスの生徒が使う教科書が二十五冊であるとすると、その教室には五冊ずつ五種類の教科書が備えつけられているなどというのが普通の姿である。むしろわれわれが何か研究をするときに、いろいろと書物をあさるときのように、生徒が教科書をあさって読んでいるのである。

日本では検定教科書だからそんなことは成り立たないし、やってもみんな同じ教科書だからむだである。しかしそれが人間の頭をいかに固定させてしまつて動きをにくくしているかも考えてみなくてはならない。日本流の教科書観は、はつらつとした創造的人間をつくらないのではないかと思われる。ひとつひとつの事がらを絶対に正しいと信じておぼえこむというのは何か愚民的である。そうでなくて近代は一貫した物の考え方で、次から次へと物を考えていく人間をつくらうとしているはずである。

日本のように、子どもが教科書をたいせつにするというより年中肌身はなさず持っているのも珍しい。教科書は学校に置いてあって、生徒はワークブックをもっていて、それで勉強しているというのは外国では普通のような姿である。そのワークブックもアメリカなどの、日本の教科書くらいりっぱであるが、それは金があるからぜいたくなのではない。子どもがワークブックで考え作業をするその頭を働かす活動をたいせつにするからである。日本のワークブックはインキキなが多いといわれるし、教科書の製作者がそんなものは作らないことにし

ているが、そこに教科書というものが占める位置がちがっているのである。結局教科書にいてあることをおぼえるというようなことしか、日本ではやりようがない。教科書万能主義である。

日本の教科書は一般に一冊の分量がすくない。外国のものは装丁がりっぱであるばかりでなく、分量が多い。日本では精髓をおぼえるためにきちっとしているが、外国のは大らかにゆたかである。おぼえるのでないから、いくら多くても読む分にはかまわないわけである。うんと多く読ませようと努力している。そこでワークブックを使って読ませようとしている。またおもしろいというか興味を起こさせる努力もそういう点から考えられているのである。

最近アメリカに非常に多くのプログラムド・テキストというのが現われている。ここ数年すると、アメリカでは、教科書は大きく変化するのではないかといわれている。つまりプログラムド・テキストにとつてかわるのではないかということである。それらを見ると、ここ四、五年前から研究して、今やつとその成果があらわれたものであるらしい。これはワークブックと教科書との合体したものとも考えることができるかもしれない。あるいは教科書をすっかり作業化したものというように言ってもよいかもしれない。

つまり教科書は、生徒によって使われるという方向にどんどん変わっていつているのである。ただ読んでおぼえるのではなく、頭を働かして教科書に對しなければならぬように生徒を追いこんでいることとしている。

### (五)

最近よく人の口にもよるPSSCの物理というのがある。これは高等学校の教科書としてつくられたものであるが、日本のものなどとく

らべると相当にちがっている。全面的に考え方主義に立つてつくられている。今の日本の指導要領の下では、こういう種類の教科書は使えないことはもちろんである。こういうものをつくるのに、アメリカの社会が数億円の金をかけてつくっているというのもよく考えてみる必要がある。

教育の進歩をささえるものにはさまざまなものがあるであろうが教科書などはその大きなものである。それをつくるには自由な進取的なものがなくてはなるまい。日本人のもっている考え方や社会制度の中ではどういそいいたたものは生まれないのでないか。そういうように考えると、事は重大な問題である。

おそらく数年のうちには、PSSCの物理の教科書のようなものが日本でも模倣されて生まれるであろう。それを小器用にやつのけるのは日本人である。しかし、問題はそれを生み出した社会のエネルギーと、ただ教科書をまねしたエネルギーとのちがいである。これからの世界で、生み出すエネルギーを持たないで日本という国が世界の中に伍していけるであろうか。おそらく差をつけられてしまうのではないかと思う。だから問題は教科書の形が似たものができるというようなことではない。独創的なものを生み出すことがたいして抵抗なしにできるということ、ある場合には社会がそれを奨励し、そういうものを生み出すために、たいへんな投資を社会がしていること、多くの教育者が物の本質を見て、ただ習慣的情性的な見方にとらわれずに、前進の努力をしていること、こういったことがよいものを独創的に生み出すのである。

今のような教科書では、そういう人間をつくることができないういろうし、今の人間では新しい教科書をつくることもできないということになると、よほど本格的に、本物をつくる努力はいかにすべきかを

考え直さないと、日本の教育は墮落の道をたどるのではないかと思わせられる。外国の教科書の与える教訓は、なかなか大きいものがあるのである。

(六)

かつて、教科書における国際理解の問題に関してユネスコの会議が催されたときに、おもしろい経験をした。これはヨーロッパで開かれたのであるが、ヨーロッパ各国の教科書がアジアのことを取り扱っているのが少ないのでこれをどうするか、あるいはその取り扱い方をどうするかといったことを研究する会合であった。この会議でわれわれアジア人が感じたことは、ヨーロッパ諸国の教科書の改善のたいへんな意欲であった。第二次大戦後の国際関係はそれ以前とは恐ろしく変わった。たいへんな数の独立国ができて、国連の中で発言力をもった。こういう状態の所では、国際理解に対する点から教科書を改訂することが必要だと考えられてきたのである。

日本で言えば、東南アジア諸国に対する取り扱いを再検討しなければならぬといった問題とよく似ている。そういう問題が日本でも出たとしても、それで国際会議を開いて検討をやっていくなどというエネルギーはなかなか出せない。日本の文部省では、検定問題で夢中になっている。学者が発言してもなかなか実現しない。金もなければ力もない。ユネスコがやってくればと待っているような態度である。イニシアティブをとって、みずから動き出すなどということは、なかなかできないのである。ヨーロッパはそういう点になると積極的である。教科書の改善にも、幅広い考え方からいろいろ手をうって地道な努力をしている。

会議ではそういう意欲が見られておもしろいと思った。事の内容は、

教科書の中にアジア文化をどう取り扱うかということであるが、それについても国際的会議をひらいて、研究をし問題を発見し、改めていこうという気迫が見られた。かれらの文化が世界をリードしていたので、アジアなどを取り扱う伝統が教科書になかったわけである。「過ちをあらたむるにはばかるなかれ」というわけであろう。たかが教科書に関しても、そういう本格的努力をすることがたいせつであると思わないわけにはいかなかった。こういう努力が、また新しいよいものをやがて生み出すのではないか。

(国立教育研究所員)